

インドネシアのスラウェシ島において、島内に生息する7種マカクについて、外形特徴の種内変異、その成長に伴う変化、種間雑種の有無などについての調査を行なった。またムーアモンキーの個体識別に基づく個体関係の分析を続けている。

3) 全国のニホンザル個体群に関するデータベースの作成

邊辺邦夫

ニホンザルの個体数や歴史的変遷を、具体的な調査報告類から再構成し、さらに系統だった資料として後世に伝えて行くために、こうしたニホンザル個体群に関する調査報告類をデータベース化する作業が進められた。

4) ニホンザルの社会生態学的、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会環境をとらえ、生存に必要な条件をあきらかにするため、屋久島と下北半島西部の地域個体数について継続的な調査を行っている。

5) 下北半島西北部の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域のM, I, Z各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。その生態学的条件や個体群内部の構造などに焦点を当てて調査を続けている。

6) 熱帯降雨林の霊長類の群集生態学

東 滋

同所的に生息する数種の霊長類について種間関係、個体群構造、資源利用などに関して比較社会生態学研究を行い community 構造のなりたちを考える。

論 文

- 1) Watanabe, K., Lapasere, H. and Tantu, R. (1991): External characteristics and associated developmental changes in two species of Sulawesi macaques, *Macaca tonkeana* and *M. hecki*, with special reference to hybrids and the borderland between the species. *Primates*, 32 (1): 61-76.

報告・その他

- 1) 渡辺邦夫 (1990) : ニホンザルの繁殖—幸島

群の例から。財団法人日本モンキーセンター年報, 平成元年度:82-86.

- 2) 渡辺邦夫・三戸幸久・和田一雄・東 滋:
(1990): 誤ったニホンザル分布論—羽柴論文に対するコメント. 霊長類研究, 6: 30-35.
- 3) 渡辺邦夫 (1990): リゾート開発と天然記念物. モンキー, 234: 3.
- 4) 東 滋 (1991): 国割岳西斜面のヤクザル個体群の地域構造. 1990年度西部林道モニタリング調査サル班報告.

学会発表

- 1) Watanabe, K. and Mori, A. (1990): Prolonged effects of developmental retardation on the prospective reproduction concerning to food-shortage observed in Japanese macaques on Koshima Island. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 49.
- 2) Watanabe, K., Takenaka, O., Iwamoto, M., Kawamoto, Y., Watanabe, T., Hamada, Y., Suryobroto, B., and Brotoisworo, E. (1990): Synthetic analysis on origin and speciation of Sulawesi macaques. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 137.
- 3) Azuma, S., and Mori, O. (1990): Hazard of Gene Pollution in Shimokita Japanese Monkey. -- Management Problems concerning hybridization with introduced Formosan monkeys. Vth Int. Congr. Ecol., Pre-Symposium.
- 4) Azuma, S. (1990): Long-termed trend of Japanese monkey population in a warm temperate forest. Vth Int. Congr. Ecol., Abstracts, p. 340

サル類保健飼育管理施設

小嶋祥三 (施設長・兼)・松林清明・
後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子¹⁾

平成2年度のサル施設の活動を以下に述べる。

- 1) 教務職員

1) 先ず、第1放飼場の改修工事が行なわれた。第1放飼場は斜面になっているため、雨水等により土砂が流れ低地部分に堆積してきた。その結果、壁高が低くなり、サル逃亡、さらには壁の倒壊の危険も予想されるに至った。長年営繕工事の要求を行ってきたが、本年度その第1期分が認められ、土どめを中心とした改修工事が行なわれた。今後、繁殖や飼育条件の改善を目指して、第1・2放飼場の次段階の改修の要求を続けていく予定である。

2) 本棟地下にいるチンパンジー「クロエ」およびテナガザルの飼育条件改善の要求が海外からあった。平成2年7月に、名古屋で国際霊長類学会が開催されたが、学会に出席したB. プレザール(かつてクロエとともに来日した仏人女性研究者)は、本研究所に来所し「クロエ」飼育条件の改善を要望した。その後女優B. バルドーによるキャンペーン、国際霊長類保護連盟(IPPL)によるキャンペーンが行なわれ、数十通の抗議文が国外より寄せられた。これらのキャンペーンには事実と反する記述が多い。この問題は現在も引きつづき対応しているところである。サル施設としては彼らの指摘にまつまでもなく、サル類の飼育条件の改善に努力しており、チンパンジーについてはサル類行動実験棟(合同棟)の建設を切望している。

3) 平成元年度にチンパンジーが脱出する事件があり、その後多くの対策が講じられた。今年度は10月にチンパンジーを含むサル逃走時の対策訓練を、サル施設職員および所員で実施した。逃亡発見から捕獲までの過程で、施設職員や所員がどのように対応すべきかを明らかにした。また、麻酔銃やトランシーバー操作の訓練を行なった。

4) サル施設職員の海外における調査。平成2年4、5月には松林(清)がヒマラヤで、ニホンザルの高所(低圧・低酸素)適応の研究を行なった。また平成3年1～3月には、類人猿飼育を担当している技官熊崎が、生活史部門杉山教授の隊に参加し、アフリカギニア国ボッソウで野生チンパンジーの調査を行なった。

5) 職員の異動については、技能補佐員東俊之と本田ヤス子が平成3年3月31日付をもって退職した。また、平成3年3月より梅田せつ子が技能補佐員となった。平成3年4月より新規採用の技官が着任する予定である。

研究概要

1) サル類の繁殖に関する研究

松林清明

交尾による連続射精前後の精液性状(精液量・精子数)の変化と回復の様相を調べた。

2) 実験動物としてのサル類の評価

松林清明

超高地(標高5000m以上)への適応能を知るため、ニホンザル二頭をヒマラヤ・シシャパンマ峰(8027m)のBCおよびABCに持ちこみ、血球成分や水分代謝系ホルモン、呼吸・心拍の変化等を調べた。

3) サル類の寄生虫に関する研究

後藤俊二

ニホンザルにおける消化管内寄生虫相の地域差等について調査を行なっている。

4) サル類の花粉アレルギーに関する研究

後藤俊二

ニホンザルにおけるスギ花粉症の発生状況を明らかにするため、各地の群れを対象にスギ特異的IgE抗体価の保有率を調べた。

5) サル類成長の生理学および形態学的研究 鈴木樹理

サル類の成長における飼育環境の影響を明らかにするために、ニホンザルとアカゲサルについて、屋外放飼群と、屋内飼育群について、体重成長、血液性状の年令に伴う変化を中心に解析した。

6) サル類のストレス定量のための基礎的研究

鈴木樹理

日常的にサル類に負荷されている様々なストレスを定量するための基礎的研究として、ヒトによる採血の場面を設定し、その際に負荷されたストレスを血中および尿中の各種ホルモンの定量によって推定する試みを行った。

総 説

- 1) 松林清明(1990): 実験動物の特性。獣医実験動物学(光岡知足・浪岡茂郎・奥水馨・前島一淑編), 川島書店。

論 文

- 1) Nakano, M., Mizuno, T. and Gotoh, S. (1990): Accumulation of cardiac lipofuscin in mammals: correlation between sexual maturation and the first appearance

of lipofuscin. Mech. Ageing Dev., 52: 93-106.

- 2) Minezawa, M., Nozawa, K., Gotoh, S., Yoshihiro, S., Hamada, Y., Inagaki, H. and Nigi, H. (1990): A cytogenetic study on congenital limb malformations in the Japanese monkey (*Macaca fuscata*). Primates, 31: 571-577.
- 3) Masataka, N., Ishida, T., Suzuki, J., Matsumura, S., Udono, S. and Sasaoka, S. (1990): Dominance and immunity in chimpanzee (*Pan troglodytes*). Ethology, 85: 147-155.
- 4) Ota, K., Makino, Y., Kimura, M. and Suzuki, J. (1991): Lactation in the Japanese monkey (*Macaca fuscata*): Yield and composition of milk and nipple preference of young. Primates, 32: 35-48.

報告・その他

- 1) 野澤謙・松林清明・後藤俊二 (1990): パラオ諸島の在来鶏と野鶏について。在来家畜研究会報告, 13: 123-131.
- 2) 中村 伸・峰沢満・後藤俊二 (1990): ニホンザルの花粉症。モンキー, 235: 4-7.
- 3) 三輪宣勝 (1991): サル類の長期飼育における問題点。アニテックス, 1月号: 24-29.

学会発表

- 1) 松林清明・赤松里香 (1990): ニホンザルの連続射精と精液性状。第37回日本実験動物学会総会。講演要旨, p. 113.
- 2) Matsubayashi, K., Nozaki, M., Suzuki, J.,

Watanabe, G., Taya, K., Katakai, Y. and Sasamoto, S. (1990): Seasonal changes in concentrations of Immunoreactive inhibin and testosterone in the peripheral blood of male Japanese monkeys (*Macaca fuscata fuscata*). XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 103.

- 3) Matsubayashi, K., Gotoh, S., Suzuki, J., Takenaka, O., Mukai, R., Narita, T., Kobayashi, R., Takasaka, M. and Honjo, S. (1990): Presence of some viral antibodies in captive and free-ranging Japanese monkey troops. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 182.
- 4) Suzuki, J. (1990): Milk, growth hormone and somatomedin C secretion in the Japanese monkey. Workshop "Growth Study of the Non-Human Primates, Practical and Ideal Design of the Study", XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc. (Nagoya), July 21, 1990.
- 5) Suzuki, J. and Matsubayashi, K. (1991): Comparison of growth between indoor- and outdoor-bred macaques. IIIrd Workshop "Research and Development on Laboratory Animal under the Japan-China Agreement on Cooperation in the Field of Science and Technology". Abstracts of the work-shop entitled "Quality control of laboratory animals", p. 22-23.
- 6) 三輪宣勝 (1990): 長期飼育における問題点。第24回日本実験動物技術者総会。講演要旨, p. 27.

1990(平成2)年度サル類動態表

区 分 種 名	増 加	死 亡							
	出 産	実 験 殺	外 傷 死	管 理 失 宜	呼 吸 器 系 疾 患	消 化 器 系 疾 患	泌 尿 器 系 疾 患	そ の 他 の 疾 患	不 明
コ モ ン ツ バ イ									2
ワ オ キ ツ ネ ザ ル								1	
オ オ ガ ラ ゴ									
ワ タ ボ ウ シ タ マ リ ン	14	3	7	1		1		1	
ヨ ザ ル	1	1							
リ ス ザ ル									
フ サ オ マ キ ザ ル	3		1						
ニ ホ ン ザ ル	52	48	1	2	5	7	1	3	1
ア カ ゲ ザ ル	37	35			1	3		3	3
タ イ ワ ン ザ ル	2								
カ ニ ク イ ザ ル	14	12				2			
ボ ン ネ ッ ト ザ ル	1								
ベ ニ ガ オ ザ ル								1	
ア ッ サ ム ザ ル						1			
パ タ ス ザ ル					1				
マ ン ト ヒ ヒ	2	2							
小 計	126	101	9	3	7	14	1	9	6
合 計	126	150							

1) 増加総頭数 - 減少総頭数 = 差引増加頭数
 126 - 150 (減少) = -24 (減少)

1990(平成2)年度末飼育頭数

種 名	頭 数	種 名	頭 数
コ モ ン ツ バ イ	7	ニ ホ ン ザ ル	396
ワ オ キ ツ ネ ザ ル	4	ア カ ゲ ザ ル	238
オ オ ガ ラ ゴ	4	タ イ ワ ン ザ ル	15
コ モ ン マ ー モ セ ッ ト	4	ブ タ オ ザ ル	4
ワ タ ボ ウ シ タ マ リ ン	15	ベ ニ ガ オ ザ ル	3
ヨ ザ ル	9	ボ ン ネ ッ ト ザ ル	14
リ ス ザ ル	3	カ ニ ク イ ザ ル	58
フ サ オ マ キ ザ ル	11	ア ッ サ ム ザ ル	1
チュウベイクモザル	1	セ レ ベ ス マ カ ク	2
ケ ナ ガ ク モ ザ ル	1	マ ン ト ヒ ヒ	9
ミ ド リ ザ ル	6	シ ロ テ テ ナ ガ ザ ル	2
パ タ ス ザ ル	1	ア ジ ル テ ナ ガ ザ ル	2
ミドリザル×パタスザル	2	チ ン パ ン ジ ー	10
		合 計	822